

とかす力 (八木重吉の詩を愛好する会会報)

事務局 (連絡先) 〒277-0014 千葉県柏市東 3-8-34 柏第一宣教バプテスト教会
*****天利武人 (教会牧師) 電話 04-7164-9159
(会報編集、ホームページの連絡先) 〒270-1406 千葉県白井市中 205 小林正継
***** Eメール kmat27aiko@gmail.com 携帯電話 09061674553

☆ 第 18 号
☆2019 年 (令和元年)
10 月 14 日 発行

★2019 年の茶の花忌案内

今年も茶の花忌が近づいてきました。生家の佐藤様に頼まれた仕事の関係で生家に何度かお邪魔する中で、今年の花忌の内容についても一緒に考える機会があり、お手伝いしながら、内容が固まって来ました。昨年参加された方々には直接案内葉書が届いていると思いますが、愛好会としても案内させていただきます。

まず概要は、12:30～ 八木家墓地で、墓前礼拝→牧野信次牧師による司式と感話

13:00頃～ 八木重吉を偲ぶ会

- ・茶の花開催に当たっての挨拶 (加藤正彦氏)
- ・講演 「八木重吉の詩に表れた津久井方言と口語自由詩」 (八木幹夫氏)
- ・スピーチ 「歌集『重吉』出版の周辺」 (江田浩司氏)
- ・八木重吉の詩の朗読 (NPO 法人「ちえの環」)
- ・愛好会だより (八木重吉の詩を愛好する会 小林正継)

今年、墓前祭の司式者が変わります。長年佐藤様が親しくされてきた方だということで、墓前祭には初めての参加になります。どのような視点から感話をされるのか楽しみです。加藤様は、重吉の詩集発行に尽力した小説家加藤武雄の甥にあたる方で、高齢にはなりましたが、茶の花忌運営の要としていつも助けてくださっています。詩人の八木幹夫氏は、地元 (津久井地域) の住民であることを生かし、今年は津久井方言の観点から重吉の詩を分析して下さる予定です。また八木幹夫氏の友人で八木重吉の詩から短歌集『重吉』を作られた江田浩司氏が話されます。その後、地元の朗読グループ「ちえの環」による重吉詩の朗読があります。最後に私 (小林) が八木重吉の詩を愛好する会として夏に開催した活動の報告と、佐藤様に依頼されてやってきた仕事の内容を紹介します。後者については貴重な資料の紹介にもなるので、きちんとした内容にまとまるまでは一般に公開しないで来たのですが、まもなく発表し、茶の花忌で皆さんにわかりやすくお話しします。期待してください。

★小山田桜台の詩碑「素朴な琴」見学と忠生図書館での講演会報告

7 月 27 日 (土) 10:15 の町田駅バスセンター集合で 6 人集まり出発しました。11:00 少し前に小山田桜台のバス停「桜台センター前」に着き、郵便局、スーパー「サンワ」の前を通り、小山田桜台集会所から谷戸池公園に抜ける場所に、詩碑「素朴な琴」がありました。心配された雨も降らず見学できました。この詩碑は建立者や建立年が刻印されておらず、最近までわからなかったのですが、町田市民文学館が古い新聞記事を見つけてくださり、1984 年 (昭和 59 年) の 5 月、小山田桜台団地を造った住宅・都市整備公団が、団地のイメージに合うこの詩を選んで、高さ 1 メートル 20 センチの根府川石で建立したものだということがわかりました。ただどのようにしてこの詩が選ばれていったのか詳しい経過は、公団事務所も把握できていないので不明のままです。

詩碑見学後 11:50 のバスで出発し忠生に向かいました。蕎麦屋「満留加」で昼食をとり 1 時少し前には忠生図書館に到着し、きれいな図書館の奥にある部屋を使わせていただき、1:30 より講演会を始めました。図書館が呼びかけてくださった方々が加わって計 14 名の方が参加してくださいました。「こころの詩人八木重吉の魅力」と題して、私 (小林) が語らせていただきました。人の心に訴えてくる魅力ある詩人八木重吉が、町田市から出た人であることを強調しました。すると講演会後地元の愛好者の方が、今年の花忌が開催されるのかと心配されていたので、記念館の佐藤様が開催することで準備していることを伝えました。質疑応答でもいろいろ



な話しが出て、町田で行事を実施した成果があったと思います。場所を提供して下さった忠生図書館の好意に感謝して帰途につきましたが、小山田桜台の詩碑が忠生図書館と近いことから、今後この地域で八木重吉への愛好の輪が広がっていけばいいなあと思いました。

→詩碑見学

忠生図書館→



★重吉の学生時代の研究の進展について

昭和 36 年の八木重吉生家焼失（風にあおられて藁屋根が一気に燃えてしまった）により、何も持ち出すことができず、八木重吉の学生時代の日記もすべて燃えてしまいました。私たちが全集等で見ている資料は、結婚後に書かれたものであり、登美子夫人の必死の保存により残されてきたものです。ですからそれ以前のもの、重吉を知っている方々からの証言によるものを記録して下さった方々の調査や研究によるものです。しかし今年が重吉没後 92 年であることを考えればわかるように、もう重吉を直接知っていた方々は、皆無です。

学生時代の様子は、学校の記録によってある程度知ることもできますが、重吉のように内向的で地味な存在は、なかなか記録にも残りません。文芸に興味があった者は、その分野の同人誌や関係雑誌、信仰者は通った教会等に記録が残る場合があります。友人だった人の記録に残る場合もあります。

八木重吉の場合は、富永徳磨の日記の記録に少し残っていたこと、蔵書のメモからの研究などが役に立っています。蔵書の一つ、新約聖書への書き込みや下線から信仰を探っていくという方法は、田中清光氏によってすでになされていますが、今高義也氏が最近、生家の協力を得て、もう一度綿密に研究し始めています。今回は、この今高義也先生の研究の一つを紹介します。それともう一つ、私（小林）が茶の花忌で発表・紹介する予定の内容が、神奈川県師範学校（通称鎌倉師範学校）時代のものになるので、その準備として、今までの研究で知られてきていることの概要をまとめておきます。

八木重吉旧蔵『新約全書』に見える書入れをめぐって

宮城学院中学校高等学校 今高義也

はじめに

重吉旧蔵『新約全書』（明治訳、詩篇附、1914 年、米国聖書会社）には、巻末余白に「大正七年十二月一日 八木重吉」と記され、聖書本文にも多くの書入れが遺されているので、記念館の佐藤様の許可をいただいて聖書の写真を撮らせていただき、研究しているところですが、現状を紹介いたします。

1 旧蔵『新約全書』について

① 入手時期

1918 年 10 月 26 日 友人と共に富永徳磨牧師を初めて訪れる（富永日記）

12 月 1 日 『新約全書』入手（巻末余白書入れ）

1919 年 1 月 25 日 「切にかつ急に」受洗を懇請する重吉の手紙が富永宛に届く（富永日記）

3 月 2 日富永から受洗

1927 年 10 月 26 日 召天

②明治訳 1917 年に「大正改訳」が出された翌年に入手し、終生愛読

③小文「聖書」（『御影師範学友会雑誌・甲陽』第 37 号、1926 年 7 月）

私は、一生の自分の行がすべていけない事であっても、聖書を人にすゝめた事は、よい事であったと信じて死ぬ事ができると思ひます。と云って、私は聖書の隅から隅まで説明出来ると云ふわけではありません。十年も、毎日、聖書のことをおもひ、殆んど読まぬ日とてないのですが、毎日毎日新しい疑にまよふてゐます。たゞ、私には、これ程好きな本が外には無い。そして、少しずつでも、分ってゆく事が多くなるのがどんなに楽しみでせう。

④重吉の死後、未亡人となった登美が遺品として愛蔵、余白には登美の書入れもある

2 書入れについて

① 分布表

項目は左から

- ・新約聖書の書名
- ・書入れの見られる頁数／各書ごとの総頁数
- ・「%」各書ごとの書入れ頁数の割合
- ・「欄外◎」：重吉が受けた強い感銘を示唆する上欄外の◎マークの各書ごとの数
- ・「文言」：各書の文言の書入れ数

八木重吉旧蔵『新約全書』に見える書入れ分布表

書名	書入れ頁／総頁	%	欄外 ◎	文 言	書名	書入れ頁 ／総頁	%	欄外 ◎	文 言
マタイ	44/58	75.8	7	7	テモテ前	5/7	71.4	0	0
マルコ	37/38	97.3	0	8	テモテ後	0/5	0	0	0
ルカ	59/61	96.7	1	10	テトス	0/4	0	0	0
ヨハネ	39/51	76.4	0	2	ピレモン	0/2	0	0	0
使徒	54/64	84.3	1	13	ヘブル	1/15	5.2	0	0
ローマ	19/26	73.1	1	0	ヤコブ	7/7	100	5	1
コリント前	27/27	100	10	6	ペテロ前	7/8	87.5	1	0
コリント後	16/18	88.9	7	0	ペテロ後	3/5	60	0	0
ガラテヤ	8/10	80	1	0	ヨハネⅠ	7/7	100	1	0
エペソ	9/9	100	0	5	ヨハネⅡ	0/1	0	0	0
ピリピ	4/7	57.1	1	2	ヨハネⅢ	0/1	0	0	0
コロサイ	6/7	85.7	0	1	ユダ	0/2	0	0	0
テサロニケ前	6/6	100	1	0	ヨハネ黙示録	17/29	58.6	1	15
テサロニケ後	0/4	0	0	0	計	375/483	77.6	38	70
					詩篇	14/154	9.1	49.1	1

傍線の種類（筆記具は万年筆とみられるペン）黒・ブルーブラック・青・赤太・細二重線・波線・傍点・丸点

② 書入れ時期 1918年12月（入手）から1927年10月（死去）の間書入れ時期の正確な特定は困難

文言の書入れ多くが〈見出し〉のように上欄外に書き入れ／聖書の箇所への評言は僅少

夏目漱石の英訳聖書に見える書入れマタイによる福音書の十字架の場面→ 上欄外に「聖賢去我遠」

3 強い感銘を示すマーク・反復読みがみられる箇所

1 愛敵の実践

マタイ 5:44-4

5 爾曹の敵を愛み〔太線〕爾曹を詛ふ者を祝し爾曹を憎む者を善視し虐待迫害ものの爲に祈禱せよ

ルカ 6:35 爾曹仇を愛し又善をなし何をも望まずして借與よ〔二重線〕

コリント前書 13:1-13〔全章にわたり傍線、上欄外に横線と◎〕

假令われ我凡ての所有を施し又焚るる爲に我が身を予るとも若し愛なくば我に益なし墨太線、上欄外に◎

全き者きたれるときは全からざる者廢るべし〔二重線〕此うち尤も大なる者は愛なり〔二重線〕

2 罪の赦し

ロマ書 3:19-24

それ律法の言ところは其下にある者に示すと我儕は知こは各人の口塞り又世の人こぞりて神の前に罪ある者と定らん爲なり〔○傍点〕是故に律法の行に由て神の前に義と爲るるもの一人だに有ことなし蓋律法に由て罪は知る也〔○傍点〕（中略）只キリスト・イエスの贖に頼て神の恩をうけ功なくて義とせらるる也〔○傍点〕

ヨハネ一書 1:7,9

3 聖霊により神の子とされる

ロマ書 8:15 爾曹が受し靈は奴たる者の如く復び懼を懐く靈に非ずアバ父とよぶ子たる者の靈なり〔○傍点〕

コリント前書 3:16 爾曹は神の殿にして神の靈なんぢらの中に在すことを知ざる乎〔二重線〕

コリント前書 12:3 又人聖靈に感ぜざればイエスを主と謂あたはず〔二重線〕

ヨハネ一書 3:1-5,9,10 1919年3月受洗時の富永の説教箇所]

なんぢら視よ我儕稱られて神の子たることを得これ父の我儕に賜ふ何等の愛ぞ世は父を識ず是に由て我儕をも識ざる也 愛する者よ我儕いま神の子たり後いかん未だ顯れず其現れん時には必ず神に肖んことを知そは我儕その眞状を見べければ也 凡そ神に由る此望を懐く者は其潔が如く自己を潔す 罪を犯す者は律法を犯す罪とは即ち律法を犯すこと也 我儕の罪を除かんが爲に主の現れ給ひしことは爾曹の知ところなり〔中略〕

凡そ神に由て生るる者は罪を犯さず蓋神の種その衷に在に因〔二重線〕

4 富の問題

マタイ 19:23 富者は天國に入こと難し〔三重線〕

ヤコブ 2:1-4〔上欄外に横二重線、◎〕

わが兄弟よ爾曹榮の主イエス・キリストの信仰の道を守らんには人を偏視ること勿れ もし人金環をはめ美しき衣服を着て爾曹の會堂に來り又貧き人汚たる衣服を着て來らんになんぢら美しき衣服を着たる人を顧みて爾この榮位に坐れと曰また貧者に爾彼處に立といひ或は我が足下に坐れと曰ば 爾曹は各人のうち區別を立たた惡念を以て人を分ものに非ずや

ヤコブ 2:5-6,8,10

我が愛する兄弟よ聽け神は斯世の貧者を選て信仰に富せ〔傍点〕己を愛する者に約束し給ひし所の國を嗣べき者とならしめ給ふに非ずや 然るに爾曹貧者を藐視たり爾曹を陵辱また裁判所に曳ものは富者に非ずや〔二重線〕〔中略〕爾曹もし聖書に載る所の己の如く爾の隣を愛すべしと云る貴き法を守らば其行ふところ善〔中略〕人律法を悉く守るとも若その一に躓かば此全を犯すなり

ヤコブ 2:14-17,19-20,22〔上欄外～左欄外にかけ「あゝわれいつれの日かヤコブに従ひ得ん!」〕

わが兄弟よ人自ら信仰ありとて若し行なくば何の益あらん乎その信仰いかで彼を救ひ得んや〔二重線〕もし兄弟あるひは姉妹裸躰にて日用の糧に乏からんに 爾曹のうち或人これに曰て安然にして行け願くは 爾曹温かにして飽ことを得よと而して其身體に無てならぬ物を之に予ずば何の益あらん乎

5 復活・再臨

コリント前書 6:14 神すでに主を甦らせ給ふ又その能力を以て我儕をも甦らすべし〔波線〕

コリント前書 1:25 それ神の愚は人よりも慧く神の弱は人よりも強し〔○傍点〕

コリント前書 15:2-8〔上欄外に「復活の主」〕

コリント前書 15:35-57〔上欄外に「如何に甦るか」〕

人あるひは問ん死し者いかに甦るや如何なる身體にて來る乎と 愚なる者よ爾が播ところの種まづ死ざれば生ず〔波線〕 又なんぢが播ところのもの將來はゆる所の體を播に非ず麥にても他の穀にても只粒のみ 然るを神は己の意に隨ひて之に體を予へ種ごとに其おのおのの形體を予へ給ふ（中略）視よ我なんぢらに奧義を告ん我儕ことごとく寢るには非ず我儕皆末の籟のならんとき忽ち瞬息間に化せん蓋籟ならんとき死し人よみがへりて壞ず我儕もまた化すべければ也 この壞る者は必ず壞ざる者を衣しぬる者は必ず死ざる者を衣べし 此くつる者くちざる者を衣この死る者しなざる者を衣んとき聖書に録して死は勝に吞れんと有に應べし〔二重線〕 死よ爾の刺は安に在や陰府よ爾の勝は安に在や 死の刺は罪なり罪の能は律法なり 我儕をして我主イエス・キリストに由て勝を得しむる神に謝す

テサロニケ前書 4:14-18〔上欄外に横二重線、その上に◎〕

我儕もしイエスの死て甦りし事を信ずるならばイエスに由る所の既に寢れる者を神かれと偕に携へ來らんことをも信ずべき也 われら主の言に託て爾曹に告ん主の臨らん時に至り活て存れる我儕は直に寢れる者よりも先だたじ それ主號令と使長の聲と神の籟を以て自ら天より降らん其時キリストに在て死し者先に甦へり 後に活て存る我儕かれらと偕に雲に携へられ空中に於て主に遇べし斯て我儕いつまでも主と偕に居ん是故に此等の言を以て互に慰むべし

6 葛藤

ロマ書 7:22-25

〔上欄外横二重線〕 蓋われ内なる人に就ては神の律法を樂めども わが肢體に他の法ありて我心の法と戦ひ我を擄にして我が肢體の中ををる罪の法に従はするを悟れり 噫われ困苦人なる哉この死の體より我を救はん者は誰ぞや 是われらの主イエス・キリストなるが故に神に感謝す然ば我みづから心にては神の法に服ひ肉にては罪の法に服ふなり〔赤・黒二重線〕

ロマ書 8:23

ただ此等のもの耳ならず聖靈の初て結べる實を有る我儕も自ら心の中に歎て子と成んこと二重線即ち我儕の身體の救れんことを俟〔○傍点〕

ロマ書 8:26〔○傍点 赤・黒二重線〕

聖靈も亦われらの荏弱を助く我儕は祈るべき所を知ざれども聖靈みづから言がたきの慨歎を以て我儕の爲

に祈ぬ 人の心を察たまふ者は聖霊の意をも知り 蓋神の心に遵ひて聖徒の爲に祈れば也
コリント後書 7:10

それ神に循ふ憂は悔なきの救を得の悔改に至らしむ然ど世の憂は死に至しむる也〔二重線〕
コリント後書 12:7-10

ガラテヤ 4:19 我が小子よ我なんぢらの心にキリストの状成までは復び爾曹の爲に産の劬勞をなす
ヤコブ 5:7 兄弟よ忍て主の臨るを待べし〔二重線〕

重吉の信仰と詩

受洗して「神の子となった後も、愛の挫折や富へのとらわれといった「罪」の問題との格闘。
重吉は、詩（芸術）と信仰の葛藤に生きた詩人ではなく、信仰そのものの葛藤に生きた詩人。
重吉の『新約全書』は一人の詩人がキリスト者として真剣に生きた痕跡。

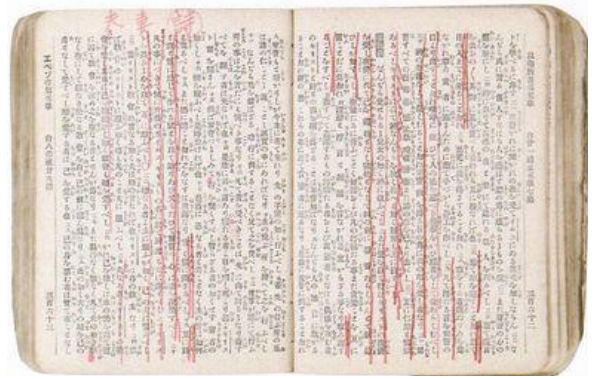
この聖書のことばを
うちがわからみいりたいものだ
ひとつひとつのことばを
わたしのからだや手や足や
鼻や耳やそして眼のようにかんじたいものだ
ことばのうちがわへはいりこみたい

（「詩稿 桐の疎林」1925年4月）

神の道

自分が
この着物さへも脱いで
乞食のようになって
神の道にしたがわなくてもよいのか
かんがへの末は必ずここへくる

（『貧しき信徒』1928年、野菊社）



おわりに

・晩年の重吉における終末観・再臨信仰

『新約全書』巻末余白に、ジョヴァンニ・パピニ LIFE OF CHRIST（1923年初版）の一節の書入れ。
LIFE OF CHRISTは、後に「未見の友」となる詩人の大木篤夫が翻訳、『基督の生涯』として刊行している。
重吉の再臨信仰は一般に言われている内村鑑三とは別ルートの影響関係の可能性があると指摘しておく。

.....

重吉の鎌倉師範学校時代の生活概要

小林正継

- 1912（大正元）年 4月 八木重吉は鎌倉の鶴岡八幡宮の東隣にある神奈川県師範学校予科に入学し、同時に実家から離れて、学校と接して建てられていた寄宿舎（寮）生活に入る。師範学校は明治19年の師範学校令に基づいて従順・友情・威儀を目標にした軍隊式教育であった。
- 1913（大正2）年 4月 本科1年生。長期休暇には実家へ帰り家の仕事を手伝っている。農村共同体の地域であったが、丘陵の間のあまり恵まれない土地であったので、水田、畑、山林を所有していたものの、収入は殆どなく、折しも日本の養蚕が急激に成長した時代になったので、八木家も養蚕農家となった。重吉は弟と一緒に桑の葉摘みなどの手伝いをしていた。
- 1914（大正3）年 4月 本科2年生。起床ラップで起床し就寝という軍隊式教育なので、肉体的にハードな授業の構成であったようで、その特徴がマラソン競争とか強行遠足と言われた長距離走行である。重吉の意志、意地の強さや、すぐに諦めない頑張り屋であることが言われているが、長距離走が得意だったというわけではなさそうだ。
- 1915（大正4）年 4月 本科3年生。予科1年の時から重吉は英語学習に力を入れている。鎌倉師範から東京高等師範学校へ進んだ、4歳上で従兄弟の小林権一郎の影響があるようだが、他人に負けないように一生懸命勉強しようとする姿勢が英語においては誰よりも優れた能力を示すことになったようだ。
- 1916（大正5）年 4月 本科4年生。重吉に最も影響を与えたのは、再従兄弟の加藤武雄であることは秋の瞳の出版で世話になってゐることからもわかる。重吉の鎌倉師範時代には、加藤はすでに上京して新潮社に

入り編集の仕事をしてながら作家を目指している。この時代インドのタゴールが注目され、加藤も記事を書いている。重吉が『タゴールの詩と文』を手に入れるのは、加藤の影響もあると思われる。鎌倉師範内に文学サークルがあったと言われており。また英語への情熱は鎌倉市内にあったメソジスト教会のバイブルクラスへの出席となっていたようだ。

どの学年でどんなことをしたかは、田中清光氏が鎌倉師範学校の同級生に直接あたってしらべた範囲でわからないのが現状であったが、記念館の佐藤ひろ子様が貴重なこの時代の資料の発見をしてくださったことにより、この時代の重吉の姿がより明確に見えて来た。それを茶の花忌で紹介したいと思っている。

★古い資料の紹介

「とかす力」16号で、幼少年時代の八木重吉の様子を伝える資料を紹介しましたが、今回は、文学アルバムへの収録には漏れたけど、柏時代の重吉の姿を知るうえで重要な資料（『八木重吉 未発表遺稿と回想』に収録されている）を紹介します。神原克重は千葉県飯岡町出身で若山牧水門下の歌人ですが、国語の教師としても千葉県下の学校で校長を務め千葉県の指導課長も務めた有能な教育者でもありました。そしてわずかな期間でしたが、東葛飾中学で八木重吉と同僚でした。後に東葛飾中学の校長を務め、校歌の作詞もしています。

・・

「貧しき信徒」を読みつつ

神原克重

北海道から今の学校へ転任して来て八木君に会ったのは丁度二年前の四月だった。色の青白いやせ形で、どこか超然とした清らかさと上品さを持った君に初対面の余は心惹かれた。詩を作る人だということは暫らくしてから知った。「秋の瞳」を買って読んだのもその頃だった。詩には全く素人の余にも短い君の詩形は、常に親しんで居た短歌の味はいに近く思われた。

〈朗らかな 日〉
いづくにか
ものの
落つるごとし
音も なく
しきりにも おつらし

〈おほぞらの ところ〉
わたしよ わたしよ
白鳥となり
らんらんと 透き通って
おほぞらを かけり
おほぞらの うるわしいところに ながれよう

〈草にすわる〉
わたしの まちがひだった
わたしのまちがひだった
こうして 草にすわれれば それがわかる

〈フェアリの 国〉
夕ぐれ
夏のしげみを ゆくひとこそ
しづかなる しげみの
はるかなる奥に フェアリの 国をかんずる

〈わが児〉
わが児と
すなを もり
砂を くづし
浜に あそぶ
つかれたれど
かなし けれど
うれひなき はつあきのひるさがり

これらの詩を余は愛唱したものだった。ひそかに君と打ち解けて語り合ふ日の来るべきことを期していた。君は勿論余が歌などに心を寄せて居る人間であらうなどとは知る由もなかったし、余も亦急いで君に近づこうともしなかった。時は自然に君と自分とを近づけて呉れるであらう、かう楽しみにして居た。その中に君は病気になって五月から引き続いて学校の方は欠勤、ついで転地するやうになってしまった。八木君は自分に対して好意を持ってゐる人間が手近に居たことを知る機会なくこの世を去ったのであった。今、八木君の詩集について物をいふ機会を与えられて特に感慨の深いものがあるのである。

「貧しき信徒」を読み行きつつ余は幾度か眼底の熱くなるのを覚えた。貧窮と病苦との間にあって妻子の上を思ひ母上を愛慕された詩は殊に深く余の心を撲つものがある。

〈母の瞳〉

ゆふぐれ
瞳をひらけば
ふるさとの母うへもまた
とほくみひとみをひらきたまひて
かあゆきものよといひたまふこちするなり

〈母をおもふ〉

けしきが
あかるくなってきた
母をつれて
てくてくあるきたくなった
母はきっと
重吉よ重吉よといくどでもはなしかけるだらう

何といふ素朴なやさしさだらう。母上を思ふ時君の心は全く幼い日にかへってただわけもなく安らかさと喜ばしさにひたり切るのであらう。

〈人形〉

ねころんでゐたらば
うまのりになってゐた桃子が
そとせなかへ人形をのせていってしまった
うたをうたひながらあちへいってしまった
そのささやかな人形のおもみがうれしくて
はらばひになったまま
胸をふくらませてみたりつぼめたりしてゐた



不治の病気としてからは妻子殊に幼い子に対するあはれさふびんさが募って行ったことであらう。この詩何げなく歌ってあるが幼子に対する深いやさしい愛情が溢れて居る。

〈春〉

桃子
お父ちゃんはね
早く快くなってお前と遊びたいよ

単純素朴に歌われて居るだけそれだけ心にひびいて来る悲痛さが深い。

〈春〉

ほんとによく晴れた朝だ
桃子は窓をあけて首を出し
桃ちゃん いい子 いい子うよ
桃ちゃん いい子 いい子うよって歌ってゐる

この詩に至っては余は泪の溢れ来るのを抑えることができなかつた。無心な幼子のほがらかに歌ふ声に聞き入って居た父親の断腸の思ひをそのまま見る思ひがする。

其の他読み行くに従って眼にとまったものを記す。

〈花がふってくると思ふ〉

花がふってくると思ふ
花がふってくるとおもふ
この てのひらにうけとらうとおもふ

一種の法悦ともいふべき心境である。

〈ある日〉

こころ
うつくしき日は
やぶれたるを
やぶれたりせど かなしからず
妻を よび
児をよびて
かたりたはむる

かういふ安らかな心持に住したこともあつたのである。誠に暴風のあとの晴れた日の如く深きしづけさを湛えた詩である。

〈素朴な琴〉

この明るさのなかへ
ひとつの素朴な琴をおけば
秋の美しさに耐へかね
琴はしづかに鳴りいだすだらう

秋を好んだ君であった。秋の麗日のもとに置かれてしづかに鳴り出す琴はやがて君の心持ではなかったか。しづかに澄める美しき君の心に対する心持がする。

〈ふるさとの川〉

ふるさとの川よ
ふるさとの川よ
よい音をたててながれてゐるだらう

いつもながら作者の心の純一さに打たれる。よくもかう単純に素朴に打ち出し得たものである。病苦に臥して幼い日にすこやかで遊んだ故郷の川が心に浮かんでくる。余はこの詩を読んで日本武尊の「やまとは国のまほろばたたなづく青垣山こもれるやまとし美し」の単純さを思い起こした。

〈冬〉

ながいこと考へこんで
きれいに諦めてしまつて外へ出たら
夕方ちかい樺色の空が
つめたくはりつめた
雲の間に見えてほんとにうれしかった

やや説明的な所があるように思へるが心惹かれる美しさを持って居る。以上は余が読過の際に心にとまったものを摘記したのである。この外幾多すぐれた作のあることを信ずるが之は詩に明るい方々の批評に上ることと思ふ。

新年会の席上の寄書で「キリストの再来を信ず」と書いたと云う八木君、転入学生の転入許可に際し英語成績が不良であるが八木君によく見て貰ふことにしませうかといふ校長の言に対し「私、見ません」ときっぱり云い切ったと云う八木君、常に芭蕉と鬼貫を愛読して居たといふ八木君、自分が兎角陰気で困るから子供らは快活にしたいといふので二人の子供に陽二、桃子と命名して熱愛して居たといふ八木君を思ふ。余は今君の遺著を前にして餘にも早く滅び行きし浄らけき魂をいたむの念うた切なるものがある。

（『野菊』貧しき信徒批評号、昭和3年）

★ あなたの「八木重吉との出会いとその詩の魅力」原稿、継続募集中

皆さんの、愛する重吉に対する思いを原稿にしてください。第5集に向けて作成を目指しています。どうぞ奮って原稿をお寄せ下さい。

（募集） 題：「八木重吉との出会いとその詩の魅力」（この内容に沿うなら別のタイトルでもOKです。）

字数：2000字程度（原稿用紙5枚程度、パソコンのワード歓迎）

締切：なし（随時お送りください）

送り先：メール（ kmat27aiko@gmail.com へ）か

郵送で 〒270-1406 千葉県 白井市 中205 小林正継 へ

★八木重吉の詩を愛好する会ホームページ案内

ホームページアドレス <http://www.yagijuaiko.com/> （作成途中の部分があることをご了解下さい）

Eメールアドレス kmat27aiko@gmail.com （管理者小林正継）